

## 政党政治家のイメージ形成について

——若槻礼次郎の伝記と地元評からの検討——

杉 谷 直 哉

(島根大学法文学部山陰研究センター)

### 摘 要

戦前の政党にとって、男子選挙の実施に伴い重視されたのがイメージ戦略であった。すなわち、増大した多くの有権者に対して、広範に自党への支持を訴えるためにはこうした新たな戦略の構築が不可欠であった。

戦前の日本の政党政治を担った政党であった憲政会・立憲民政党の総裁であり、内閣総理大臣を務めた若槻礼次郎は、そうしたイメージ戦略を見る上で先駆けとなる人物であった。若槻は普通選挙制度を確立した人物のひとりであり、今後予想される初の普通選挙を実施する政治家として期待されていた。若槻は政治改革のシンボルとして期待されていた。こうしたイメージ戦略は政党に対するネガティブな印象を打ち消すための手段として、伝記や若槻の地元である島根県での活動を通して展開された。この動きを、戦前の政党が自らへの批判を打ち消すための戦略として位置づけた。

キーワード…若槻礼次郎 克堂会 伝記 政党政治 普通選挙

本稿では戦前の政党政治家のイメージ形成について扱う。戦前の政党が政権獲得のために、敵失を暴きあうスキャンダル合戦を繰り広げ、結果的に政党は国家と社会の媒介になりえず、政党政治の崩壊につながったことはすでに数多くの研究によって指摘されている<sup>1)</sup>。

しかし、政党政治がなすすべなく崩壊した訳ではなく、広範な民意

を汲み取り、統治能力を高めるために質的転換を図ろうとしていたことも指摘されている<sup>2)</sup>。メディアや言論人からの政党批判は当時から存在しており<sup>3)</sup>、そうした議論が政党政治の崩壊という事実によって注目されてきた。一方で政党を擁護し、批判を克服するための取り組みには関心が集まらなかった。近年では川口暁弘氏が政党政治家で内

閣総理大臣を務めた浜口雄幸に「道徳政治家」としての側面があったとしている<sup>4</sup>。この指摘をさらに掘り下げれば、当時の政治家としても汚職やスキャンダルによる政党批判は承知しており、率先して道徳や理念を提唱することで、政党政治の正当性を社会に訴えていたのである。そこで、本稿では政党政治家のイメージ形成の取り組みを政党側の批判を克服するための取り組みとして位置付け、さらにその政治家のイメージ戦略が結果として社会にどのように入透していったのかを明らかにしたい。特に一九二五年に男子普通選挙が実現すると、不特定多数の有権者に支持を訴えるために、イメージ戦略は従来とは比較にならないほどの重要性を帯びていったのである<sup>5</sup>。そこからは、当時の政党政治をめぐる課題と期待を読み取る重要な視座が得られるだろう。本稿では二度にわたって内閣総理大臣を務めた若槻礼次郎の伝記と若槻の地元である島根県における若槻のイメージがどのようなものであったかを検討する。

ここで戦前の内閣総理大臣の伝記について簡単に記したい。戦前の日本では内閣総理大臣に就任した人物の伝記が数多く発刊され、御厨貴監修『歴代総理大臣伝記叢書 全三三巻・別巻一卷』(ゆまに書房、二〇〇五―二〇〇七年)としてまとめられている。あわせて別巻では伝記の解説が収録されており、若槻の伝記の一つである尼子止『平民宰相若槻礼次郎』(モナス、一九二六年、以下『平民宰相』と略記)についても若月剛史氏による解説が書かれている。若月氏は「若槻に何が期待されていたのか」を検討することは「戦前日本の政党内閣制を考える上でも大きな意味を持つ」として、伝記史料を検討することの意義を見出し、伝記は「その性格上脚色も多いため、史料として利用しにくいのは否めない」としつつも、「若槻周辺が彼をどのように

売り出そうとしていたのか読み取れるものとなっている」と評価している<sup>6</sup>。そして伝記全体の検討を通して「正義の景仰者」、堅実、「責任政治家」、達弁家、これらの点が若槻に期待されていた」と結論付けている<sup>7</sup>。若月氏の研究は『平民宰相』の内容を適切に要約しているだけでなく、伝記研究の意義を明らかにしている点で重要であるが、解説という性格上内容の要約にとどまっている。後に見るように若槻は当時の政党政治の抱えていた問題点を解決する人物として描かれており、政党内閣制を正当化する手段の一つが伝記だったのである。

ここで若槻の伝記について概略を述べたい。いずれの伝記も若槻が首相に就任した一九二六年に発刊されているものである。まずは『平民宰相』である。本書は若月氏が指摘する通り「新首相たる若槻の伝として書かれて」いる。著者の尼子は若槻と同じ憲政会・民政党の政党政治家で首相を務めた浜口の伝記を書いており、大日本学術協会を設立し、教育評論家、教育ジャーナリストとして活躍した人物であった<sup>8</sup>。

次にもう一つの伝記である島根県教育会編『若槻大宰相』(六盟館、一九二六年、以下『若槻大宰相』と略記)についてみていきたい。この伝記は島根県教育会の機関誌である『島根教育』の特集号として発刊された「若槻首相号」(第三七二号、一九二六年)を書籍化したものである。発刊の経緯については、編者である永迫藤一郎が郷土人雑誌『島根評論』で述べている<sup>10</sup>。

永迫によると、一九二六年二月の島根県教育会の臨時総会の際に、「首相が今日ある事歴には教育上参考になるべき事が多々あろう」とのことから、『島根教育』誌上で若槻に関する特集を組むことが決ま

り、各地で資料調査と取材を行い、雑誌の発刊にこぎつけたという。その後配本の申し込みが多数あったことから、書籍化の運びになった。永迫は書籍化に際しては雑誌編集時には出来なかつた若槻との面会を実現させ、「若槻首相号」の誤りについて逐一修正を受けたと述べている。その際に若槻は「こんな事はどうでもよいのだけれども、訂正するというなら、間違っている点だけは御話ししよう」と語ったとのことである。『若槻大宰相』は「教育上参考になるべき事」があるとの狙いから元となる雑誌が編集され、更に若槻自身による校正を受けたのである。『平民宰相』は「本書は立志伝であり、成功物語であつて、新日本の青年の好き読ことを読物であることを疑わぬのである」<sup>11</sup>と述べており、いづれも教育的効果が期待されていることがわかる。

以上、簡単に二つの伝記の概要を述べた。いづれの伝記にも共通して言えるのは、若槻イメージを世間に形成することを目的とした点である。そして、先述の通り本稿では二つの伝記によるイメージ戦略として位置付けるのに加え、そのイメージが浸透した場として若槻の出身地である鳥根県の地方紙を分析する。ここから、政党政治家のイメージ戦略とその結果が明らかになる。

## 第一章 二つの伝記の検討

本章では二つの伝記の中から特にイメージ形成に関わる記述を取り上げ、若槻のイメージ形成を検討していく。そこからは、当時の政党政治の抱えていた課題と、それに対する解決する人物として若槻が期待されていたことを明らかにする。

### 第一節 『平民宰相若槻礼次郎』

『平民宰相』の章立ては次のようなものとなっている。

#### 緒論

故郷の十九年(1)

故郷の十九年(2)

上京―学生時代―

主税局長

大蔵次官

大蔵大臣

政党生活

内務大臣

憲政会総裁

内閣総理大臣

#### 結論

章立てからわかるように、本書は若槻の一生を丹念に追っていく内容となっている。すべての内容を要約するのではなく、ここではイメージ形成に関わるものを中心に論じたい。

まず緒論では「二度目の平民宰相」という書き出しから始まり<sup>12</sup>、若槻が原敬に次ぐ二人目の平民宰相であることを強調している。注目すべきは若槻が内務大臣として成立に関わつた普通選挙が、第一次若槻内閣で初めて実施されることが予測されていたことである。「普通選挙の立案者が平民宰相として普通選挙の総選挙に干与すると云ふのは、最も会心のことであり、似合はしきことでもあり、更

に絶好の試金石でなければならぬ<sup>13</sup>」としているように、若槻＝平民宰相・普通選挙といった政治の新時代の到来にふさわしい政治家であるとのイメージが本書では繰り返し強調されていくこととなる。

次に重要なのは本書が若槻を「正義の景仰者」と称し、「力の信者」であった原と対比させている点である。「我国の政治家は極端に力の信者であり、勝つことに腐心し過ぎ、正義の念が希薄であり、無神経になってしまつて」いる<sup>14</sup>。しかし、若槻やその前任者である加藤高明は違う。「若し加藤が力の信者であつたならば、十余年の苦節を忍ぶ必要もなく、少数党の総裁として悩む愚劣さを笑われるようなこともなかつたに相違ない<sup>15</sup>」。若月氏はこの点について、「政党内閣期において『力』が必ずしもプラスイメージではなく、同様に『正義の景仰者』に徹することが戦略の一つとして政治の世界でも認識されていたことは確かである<sup>16</sup>」としている。次の「郷里の十九年」では島根県での暮らしについて述べているが、興味深い指摘としては、若槻が当時すでに地域で英才として知られていた岸清一の上京に刺激を受け、彼の「競争心」に火がついたというものである<sup>17</sup>。当時の地方の若者にとつて、東京で最先端の教育を受け、官僚や軍人として名をはせていくことは、典型的な出世コースでもあつた<sup>18</sup>。本書には青少年に若槻や岸のように東京へ出て活躍するように促し、教育者にはそのような人材を地方から輩出するように導く狙いがあると思われる。以後、学生時代に東京帝国大学法学部を首席で卒業し<sup>19</sup>、大蔵官僚として頭角をあらわし、桂太郎や西園寺公望の知遇を受けた様子が描かれている<sup>20</sup>。

イメージ形成において注目すべき記述としては、若槻が大蔵大臣に就任したのは第三次桂太郎内閣の時に行った演説の評価が挙げられ

る。この時の演説について本書は「左して精彩あるものではなかつた」としているが、これは後年の名演説と比較した際に、若槻の政治家としての成長を印象付けるエピソードとなっている<sup>21</sup>。

桂は退陣後に間もなく死去する。桂の後継者として同志会を率いるのは加藤であり、若月氏が「加藤高明との新たな信頼関係の形成に重点を置」き、「加藤の後継者としての側面が強調されている」と指摘する通りである<sup>22</sup>。

次に若槻が大蔵大臣として再び政治の表舞台に立つのは一九一四年に発足した第二次大隈重信内閣の時である。イメージ形成において重要と考えられる記述は蔵相を辞任した時の評価についてである。辞任のきっかけは第二次大隈内閣の内務大臣大浦兼武が関与した疑獄事件であり、加藤外相をはじめ複数の閣僚が辞任し、若槻もそれに続いた。この件については「責任政治家の好典型」と題して若槻の辞任を「政治家としては完全に其の存在を鮮やかにした」と論じており<sup>23</sup>、若槻が実直かつ誠実な人物であるというイメージ形成をはかる狙いがあることがわかる。

次の章である「政党内閣」では若槻が一九二四年の一〇月に内務大臣として松江に錦を飾った場面から始まり、決してその道のりが平たんではなかつたことを強調する<sup>24</sup>。更に与党の時には歓迎し、野党の時には冷遇する態度が「革新のない政治屋」を生み出してきたとす<sup>25</sup>。若槻は、こうした「政治屋」とは異なることが本書では繰り返し強調されていく。

野党時代の若槻が「政治家」として「世間に承認」されるきっかけとなつたのが「二時間四十分の大演説」であつた。それは一九二三年に貴族院で行つた陪審法案に対する貴族院における反対演説であつ

た。ここが「政治家としての若槻」が「政治家としての若槻」としてもその地位を確立するに至った転換点であったと強調する<sup>26</sup>。若月氏は「こうした観察は、同時代的に議会に出入りしていた著者のものだけに、ある程度真実を衝いているであろう」としている<sup>27</sup>。若槻が演説によって政治家として地位を確立したことを強調することは、政党内閣期における首相として若槻がふさわしい人物であるというイメージを印象付けることにつながっていく。

内務大臣の章では、第一四回衆議院議員総選挙における勝利によって、憲政会を中心とする加藤高明内閣が成立し、若槻が内相に就任した後のことが書かれている。内相として初めて地方長官会議に臨んだ若槻の演説は「威圧しようとする風の微塵もない紳士的な態度」であり、かつ、「政党出身でありながら政党臭がなく、地方長官が党的色彩を帯び、与党に偏するの断じて不可である」とするものであった。このことについて本書は若槻が「心から国運の進展を図ろうと熱望」しており、「正義の景仰者には政党の利害の如き眼中にない」としている。そして従来なら政権交代に伴って行われる地方長官の交代がほとんど行われないことを若槻の「公平」な態度の証明であると主張する。当時の政党による地方長官の交代が選挙干渉や地方自治の混乱を引き起こす土壌となったことはよく知られている<sup>28</sup>。本書は若槻の「正義の景仰者」という肩書きが空文ではなく、政党政治の問題点を解決するための行動として実践されていることを具体的に指摘しているのである。

成立した加藤内閣の重要政策の一つが普通選挙の実現であった。本書は若槻が内相としてこの普通選挙の実現に尽力したとして、普通選挙を実施するための衆議院議員選挙法の改正演説を取り上げ、先の陪

審員法案への反対演説と並ぶ名演説であると主張する<sup>29</sup>。若月氏が述べるように、「本書の後半部分では演説が多数引用されている」一方で、先述した第三次桂内閣の演説のように省略されているものもあり、「こうした取捨は目前にせまった普選を意識したものであると言えよう」<sup>30</sup>。

ちなみに、この時にあわせて成立したのが治安維持法である。若槻は内相としてこの法律の成立にも関わっているが<sup>31</sup>、本書がどう記述しているかについて、同時代の評価を考えるうえでも興味深いので見とおきたい。本書は治安維持法は若槻にとっては「苦痛であったかも知れぬ」としつつ、「普選と云う国民の大多数の要望を充たすため」の「一二の小さな犠牲」は致し方ないと述べている<sup>32</sup>。こうした評価は、治安維持法が後年苛烈な弾圧のために使用されたことを鑑みると、余りに危機感のない評価であるが、こうした弁明がなされること自体、治安維持法への懸念の声を意識したものと見えよう。

次に若槻が内務大臣として着手したのが行財政改革であった。本書はここに「政治家としての若槻」がその辣腕を振るったとして次のように強調する。

即ち、「地方行政を政党的のサムシングが支配」することで、「党略上から不急の諸事業をも企図」し、「地方財政は膨張」している。このような事態を正すには「若槻氏のような傑出した政治家」が必要であり、それには「政党臭味の排斥者であり、公平私なき人物」が必要である<sup>33</sup>。地方利益誘導は政党が地域に影響力を強めるための重要な手段であったが<sup>34</sup>、利益誘導を克服する政治家としての若槻の役割が期待されているのである。

最後に、本書は首相として政権のかじ取りを展望している。若槻が

「金のできない総裁」であることは本人も認めるところであったが<sup>35</sup>、実はこうした見方は当時から存在していた。本書は若槻が「財閥をバックとせず、閥閥なく、藩閥と何の因縁がないので、憲政会の前途に少なからず暗影が投げかけられたと観察するもの」があり、過去の首相の方が「威望」と「重味」があったことを認める<sup>36</sup>。そして普選の前にそのような肩書は党首には不要であると断言する<sup>37</sup>。その後、新聞の社説や貴族院議員の若槻評を次々と引用していき、若槻が加藤内閣の政策を継承することに期待する。そして、本書は結論として次のように日本のこれまでの政治を振り返る。

即ち、これまでの政治家には「表裏が余りに多過ぎ」た。そして政治家を選ぶ国民もまた、そうした政治家の生活に無関心であり、「非紳士の行為があっても咎めない」ばかりか、「手腕家」として評価してきた。こうして「政治家と道徳とは無関係」なものと見られ、政治への「嫌悪」を生み出していった。そして「政治は俗中の俗」のものであると認めつつも、「国民の実生活を基調として考えなければならぬ政治は、決して不純の政治家の私議に」委ねてはならない。現在の政治は「完全に国民化した」と言ってもよい状況にあり、「政界革新」を進める必要がある。そして、政治の墮落の事例として、選挙における買収行為を取り上げ、こうした政治腐敗を撲滅するためには若槻の信条である「正義」を基調とするべきであると主張する。なぜなら「正義こそ偽りなき永遠の勝利者の左券であるからである」<sup>38</sup>。

また若槻が資金的スキャンダルを引き起こしていないことを以て、いわゆるクリーンな政治家であることを高唱する。そもそも若槻は「党費の捻出者として十分に資格がある」ために首相に就任した訳ではなく、党員も「党費を巧みに捻出し得ると打算した」訳でもない。

勿論すぐには政治と金の問題は解決しないであろうが、政党の指導者が即ち「党費の捻出者」に結びつかなくなった事実を以て、若槻が指導者として不適合であるとする批判に反論する<sup>39</sup>。最後に「政治屋無用の時代へ」と題して若槻は内政・外交の問題や党費の問題を必ず解決できると主張し、「政治家が完全に独立人として言論を」武器とする時代が到来すると予言する。その時代に誘導するのが若槻なのであると本書は述べる。そして、「政治家が勇敢に正義を唱え、政党の統率者が党費の捻出者たる必要なしと云う時代を迎えるならば、唯だ政策を以て公明に争う以外には、政党と政治家のなすべきことはなくなり、「真剣に実生活を基調とする政治が考えられ」、「政治屋は無用になる」とし、若槻がこの「大使命」を遂げるために出現したと期待して本書は終わっている<sup>40</sup>。

ここで本書が主張した若槻イメージについてまとめたい。若槻は「正義の景仰者」であり、言論を重視する普選を実施するにふさわしい公正かつ実直な政治家であることが述べられている。また、そうした性格を持つ若槻という政治家によって、当時問題となっていた政党による知事の異動や利益誘導といった個別具体的な問題点が解決されることが期待されていたのである。若槻は改革者であり、クリーンな政治家であるというイメージを若槻周辺が形成しようとしていたのである。

## 第二節 『若槻大宰相』

次に『若槻大宰相』の検討に入る。『若槻大宰相』の章立ては次の通りである。

第一編 緒言

第二編 経歴

第一 生い立ち

第二 少年時代

第三 教員時代

第四 学生時代

第五 官吏時代

第六 政治家時代

第三編 性格

第一 至純至情

第二 至誠力行

第三 熟慮断行

第四 円融無碍

第五 清節高誼

第六 堅忍自重

第七 自立自営

第四編 家庭

第五編 趣味

第六編 月旦

第七編 雑俎

章立てから分かるように、本書は若槻の人格や家庭での生活にまで言及がなされている。教育色の強さは章立てからもうかがえる。前節と同じく、イメージ形成に関わる記述を中心に取り上げていきたい。

緒言では若槻の旧友や若槻を教えた教師がまさか若槻が総理大臣に

なるとは思わなかった、という反応が取り上げられ<sup>41</sup>、若槻がこれまでの英雄的な非常人とも言えた歴代首相とは異なる「平凡宰相」であることを強調する<sup>42</sup>。

学生時代の若槻は苦学生であること、東京帝国大学法学部を首席で卒業したエピソードに加え、生来虚弱なところがあつた体質も、柔道やスポーツで鍛えられたことが紹介され、若槻が「大器晩成」型の人間であり、努力の結果「外柔内剛の性格」を培つたとする<sup>43</sup>。

その後大蔵省に入省した若槻は省内で頭角を現し、主税局長に就任する。本書は特に若槻が議会における答弁で他の追隨を許さなかつたとしている<sup>44</sup>。こうして若槻は桂や西園寺公望に評価され、やがて第三次桂内閣で大蔵大臣に抜擢されることとなる。第三次桂内閣は短期間で瓦解するが、若槻の蔵相としての最初の演説について、本書は後に大蔵大臣となつた高橋是清の演説と対比させて「他日政友会の所謂積極的放漫なる財政政策と憲政会の所謂緊縮政策との依つて相分るる所以は早くもここに明に其端緒を開い」たとしている<sup>45</sup>。先の『平民宰相』では演説が精彩を欠いているとして引用が控えられているが、こちらでは政策的な対比を強調するために演説が引用されていることを指摘したい。

「政治家時代」では日本の政党史を概説し、若槻が桂に安定した政策を実現するためには議会に基盤を置く政党の結成が必要であると説き、桂の死後は同志会、憲政会にとどまり政党政治の発展に努めたことを評価する<sup>46</sup>。

続いて第二次大隈内閣で蔵相に就任した時の演説を草稿を持たずに行ったことを高く評価した上で<sup>47</sup>、大浦事件によつて若槻が辞職したことを「英国の美風である責任政治に私淑し」た「正義公道に従う紳

士的態度」によるものであり、「無責任なる政治家の多き我国に於いては珍らしい事実として伝えられている」とする<sup>48</sup>。あわせて若槻が大隈の慰留を固辞したことが取り上げられており、若槻が「正義感」と「責任感」ある政治家であるというイメージが強調されており、「平民宰相」と同様の評価が下されている。

ここから憲政会の「苦節十年」に話が移る。本書でも陪審員法に反対した大演説のことが触れられているが<sup>49</sup>、本書は政治家として必要な条件として「弁論」を挙げ、若槻が堅実な論理で演説を行うことを高く評価する<sup>50</sup>。本書は苦節十年について次のような評価を下している。

即ち、「苦節十年の在野時代は若槻氏にとつて政治家として実に好個の修養時代であり、「辛苦に耐え艱難に打克つことによつて初めて人格の円満なる完成が期し得らるのである」。「在野当初は」「多少官僚臭味あつたようで、党人間には陰口をいうものもあつたけれども、近來はスツカリ官僚臭味を脱して頗る平民的とな」り、「立派な政治家として押しも押されぬ貫録を有せらるようになった。これ全く苦節十年の賜であるといわなければならぬ」と<sup>51</sup>。

本書はその後早々に憲政会が政権を獲得した後の若槻の動きへ話を進めていく。ここでも、内務大臣として内閣の中心的存在となり、普選の成立に尽力したことが強調される<sup>52</sup>。また、内務省内での評判もその公平さから高かったことを述べている<sup>53</sup>。

そして加藤首相の急死の後、若槻が総裁を引き継ぎ首相に就任したことを述べる。新総裁の若槻については「前総裁に比して金力の点で、三菱のごとき背景を有しない事が欠点である」という指摘があるが、「新時代の党首としては金力よりも其識量と人格とを必要条件と

するのである」<sup>54</sup>と評価する。

次に本書は今後の政党のあるべき姿について力説する。

即ち、「従来の政党は総裁専制であ」り、総裁の強い統制下にあつた。なぜなら、「党費」や「選挙運動費」を党首が工面していたからであり、「政党ほどデモクラチカルなものはない筈」なのに、多くの「悪弊醜態」が露呈してきている。それに対して「政界の革新運動」が起ころうようになってきた。「今後の政党は金力よりも人材が必要であ」り、「人材さえ集まれば選挙運動に多額の費用を要するが如きことは決してな」く、従来のような選挙運動では有権者の数が数倍になつているので、たとえ金力を背景としても、到底費用のすべてを調達することは出来ないだろう。それならば、「今後の政党は主義政策」によつて結集し、「党費は党員が負担し選挙運動費は有権者が之を支出して自己の代議士を選出」するべきである。従つて新総裁の若槻が不安視されることは全くないのであると<sup>55</sup>。

そして、若槻が貴族院との交渉に優れ、社会問題にも理解があることを指摘し、「政治は力である」という原とは異なり、「政治は正義である」というモットーに基づく政治を行うことを期待する<sup>56</sup>。本書は一方で、若槻内閣が少数与党であることを弱点であると指摘するが、それでも重要法案を相次いで成立させた若槻の手腕を高く評価し<sup>57</sup>、今後の政権運営が盤石であると述べている。

また、『平民宰相』には見られない特徴として、若槻と教育の関係を論じている点を指摘しておきたい。最後の雑俎で義務教育費国庫負担増額に取り組む若槻の姿勢を取り上げ、若槻こそが「教育の尊重者」であるとして本書は終わっている。義務教育費国庫負担金増額は、憲政会・民政党の地方政策の目玉であつたが、本書は教育関係者



が出版にかかわっていることもあり、そうしたイメージを訴えることが有効であると判断されたのだろう。

最後に本書が主張した若槻イメージをまとめていきたい。『平民宰相』と同様に若槻にクリーンで、言論本位の来るべき普選の時代にふさわしい政治家としてのイメージが形成されている。ちなみに、本書では普選によって選挙の浄化が行われることが期待されているが、同様の見解は吉野作造のような知識人も示しており<sup>58</sup>、当時の普選への期待の広がりが見える。若槻こそが普選を行うのにふさわしい人物であるというイメージは、伝記というメディアを通して形成されていたのである。

## 第二章 若槻礼次郎の島根県におけるイメージ形成

本章では若槻のイメージがどのように社会に浸透したかを見るために、若槻の島根県にける評価、いわゆる地元評を検討する。今までみてきた伝記におけるイメージ形成が、単に伝記による評価だけでなく、地元島根県におけるイメージ形成と連動しながら形成されていったことを指摘する。そのために一九二〇年に結成された若槻の個人後援会である克堂会と、島根県の二つの地方紙である『松陽新報』（以下『松陽』と略記）と『山陰新聞』（以下『山陰』と略記）における若槻評から島根県において形成されていた若槻イメージを明らかにする。ちなみに、『松陽』が憲政会・民政党系であり、『山陰』が政友会系である<sup>59</sup>。

### 第一節 克堂会の結成から第一次若槻内閣期まで

若槻の島根県におけるイメージ形成の先鞭をつけたのは一九二〇年に松江で結成された克堂会の存在である<sup>60</sup>。克堂会の設立要旨にはまず「克堂君三個信条」として「忠孝ノ大義ヲ本トスル事」「正義ノ觀念ニ合致スル事」「進歩ノ常道ニ順応スル事」を挙げている<sup>61</sup>。この忠孝、正義、進歩の理念は若槻の島根県におけるイメージ形成に必要な役割を果たしていく。そして続く設立要旨は次のように述べている。

即ち、「我島根県地方ハ山陰ニ僻在スルモ、古来偉人傑士ノ史跡」は少なくない。明治維新後も多くの人材を輩出したが、「大臣ノ印綬ヲ帯ビ、今ヤ中央政界ニ於テ一方ノ重鎮トナリ、我県代表的人物トシテ氣ヲ吐ク者ヲ求ムレバ、独克堂若槻礼次郎君アルノミ」である。「而シテ其人ト為リ温厚ニシテ、国家ノ財政ニ通曉セラルコトハ、朝野人士齊ク是認スル所」であり、若い時から苦勞を重ねて、藩閥や郷党の支援がない中で政界の地位を築いてきた。それは「其聡明英才ノ質ト量トニ於テ、習得シタル実力ノ發露ニ外ナラ」ず、「故ニ今日政界ニ於ケル我地方出身者中、君ヲ推シテ空前ノ偉材ト称スルモ」過言ではなく、「誠ニ郷党ノ誇ト為スヘキ」である。そして「君ノ我地方ニ於ケル政治的立脚地ヲ援護シ、之ヲシテ其信念ヲ国政上ニ發揮大成セシムルハ、独郷人トシテ同君ニ対スル当然ノ情誼タルノミナラス、亦以テ国家ニ忠ナル」ところであり、加えて「君ノ師表的経歴ヲ宣シテ教育上ニ資シ、以テ後進ヲ提擲誘掖セハ、必スヤ感奮興起シテ、先輩ニ対スル尊重私淑ノ美風ヲ養成シ、以テ将来我地方ヨリ更ニ絶大ナル材能ヲ發揮シテ、各方面ニ活躍シ、国民民福ヲ企図スルモノ、彬々トシテ輩出スルニ」至るだろうと<sup>62</sup>。

注目すべきは政党政治家の後援会であるにもかかわらず、政策的な話題が一切記載されず、教育的な側面が強調されている点である。若槻は貴族院議員ではなかったため、克堂会は選挙活動を行う後援会としてだけではなく、教育的な目的も兼ねていた<sup>63</sup>。

次に地方紙に登場する若槻イメージの検討に移る。若槻が地方紙に頻繁に登場するようになるのは首相就任前後の頃からである。一九二六年に若槻が首相に就任すると、『山陰』は特集を組んで若槻のことを取り上げた<sup>64</sup>。松江では克堂会が中心となって祝賀会が開催され、直後の県議選では憲政会が大きく躍進した<sup>65</sup>。この他に郷土人雑誌『島根評論』でも若槻の特集が組まれているが、その内容は若槻に多くの期待が寄せられているものとなっていた<sup>66</sup>。

地方紙の若槻への強い関心は第一次若槻内閣総辞職後も変わらなかった。『松陽』は一九二七年に若槻が島根に帰郷した時に「若槻前首相を迎えた効果」と題した社説を二日間連載した<sup>67</sup>。『松陽』は若槻について、今までの首相(伊藤博文、大隈、原、加藤)と違い、「諄々として能く総てを屈するのが我若槻氏の特徴で、首相級の人物中では実に第一の弁論家だ」としている。更に『松陽』は若槻が県内の学校で行った訓話の内容に注目する。中学校では卒業後に与えられた職分に対して努力し、誠実であることを訴え、小学校では人としての勤めや身のため、家のために尽すよう訴えて、「正義を踏みて」「邪路に入らぬよう注意了した」として聞く者は前首相の訓話に感動しただろうと述べている。加えて若槻が一般の聴衆に対して「進歩」の観念を強調したことも指摘し、次のように述べている。

要するに前首相の主旨は、努力と進歩とで、然も忠孝正義を基礎

とせねばならぬといふに帰着する。而して其排する所は浮誇と輕薄とだ、前首相が其立志伝的な体験から、之を切言し剴説したの<sup>マ</sup>は、我県市人男女老幼に取つて、実に価値多い金言だ、前首相を歓迎し得た効果茲にありとせば、其收穫やまた偉なりと言わねばならぬ

このように若槻は島根に帰った時には学校を回って訓話を行っていた。克堂会で述べられた教育の規範としての姿を演じていた。このことは島根県教育会の『若槻大宰相』の「教育の尊重者」というイメージとも関連する。若槻は政治的権威ではなく、習うべき模範としてのイメージを定着させていく。

## 第二節 ロンドン海軍軍縮条約以後

若槻が次に政治の表舞台に登場することになるのはロンドン海軍軍縮条約全権に任命された時である。『松陽』は「我郷土の誇るべき政治家」と題する社説で若槻が全権を引き受けた苦心を察しつつ、その決意を高く評価した<sup>68</sup>。一方、『山陰』は当時の若槻がスキヤンダルを抱えていたことを指摘し、全権としての資格があるか疑問を投げかけつつも<sup>69</sup>、「よくその重大任務を果たして雄々しく帰来するの日は待とう」とした<sup>70</sup>。

ロンドン海軍軍縮条約が締結されると、一九三〇年一〇月に若槻は島根県へ帰郷した。『松陽』は特集を組んで若槻の帰郷と県民の歓迎会の様子を伝えた。「若槻氏の帰郷を迎えて」と題する社説は次のように述べた。ロンドン海軍軍縮条約は「一国の優越を認めざる中正妥当なる協定」であり、「何人が当ってもこれ以上な協定は出来まじ

く、今日の世界では国際平和への最大限度の貢献と解して過言でない」。そして無事に条約を締結させた若槻は「世界に於ける最高級の政治家として認識されたのである」とする<sup>71</sup>。『松陽』は若槻を「平和の使い」「文官の海軍大将」としてその功績を讃えた<sup>72</sup>。島根に滞在中の若槻はゆく先々で熱烈な歓迎を受けたことを『松陽』は詳細に伝えた。

ここでもやはり注目されるのは、若槻が地元の学校に時間を割いて訪問し、訓話を行っていることである。代用教員を務めていた大津村の小学校で「ロンドン会議に於て正直で進んだ例をひき将来世に立つ時は必ず正直にしなければならない」と訓話した<sup>73</sup>。また、松江高等学校では自分は「座右の銘として忠孝、正義、進歩を心掛けて」おり、それらが日本の国体に必要であること、「自分の運命は努力によって開拓すべき」であると説いた<sup>74</sup>。若槻は訓話の中で自身の信条として掲げた忠孝、正義、進歩の意味を繰り返し説いている。加えて、ロンドン海軍軍縮条約の締結と関連してまごころの重要性を説いているのも興味深い。浜田小学校でも自らの政治信条である忠孝、正義、進歩を訴えたのに加え、ロンドン海軍軍縮条約の経験から「まごころ」をもって人と接すれば外国の人とも分かり合えるという趣旨の訓話を行った<sup>75</sup>。若槻は単に各地で歓迎を受けて演説や集会をこなしていただけではなく、自ら教育的規範としての役割を地域で演じてみせた。こうした試みが若槻自身の発意によるものだったのか、それとも学校側の働きかけであったのかは判然としないが、ここでは当時の政治家が学生に対して道徳的な訓話を発し、教育的規範を示そうとしていたことを指摘しておきたい。このように若槻自身の県内での活動を通して島根県内での若槻イメージは政治的な權威を超えた模範となるべき

人物像として定着していったのである。

その後、若槻は浜口首相遭難に伴い、再び首相に就任する。このことを『松陽』は「第二次若槻内閣を祝す」と題して歓迎した<sup>76</sup>。松江では第二次若槻内閣の誕生を祝う提灯行列がなされ、松江市長の名前で祝電が発せられた<sup>77</sup>。若槻も『松陽』の紙面を通じて島根の支持者に謝意を伝えた<sup>78</sup>。

『松陽』は民政党系であったため、概して若槻に対する好意的な記事が多いが、そうした党派性を差し引いても、島根における若槻人気は根強いものがあつたと言えよう。

第二次若槻内閣が総辞職し、政友会の犬養毅内閣が成立すると、一九三二年に第一七回衆議院議員総選挙が行われ、与党の政友会が圧勝した。この選挙戦では若槻が民政党の総裁として選挙戦の中心となったが、『松陽』は若槻を中心とする民政党を支持する社説を掲載した<sup>79</sup>。これに対し、『山陰』は「個人若槻男に郷党の大先輩として崇敬を捧げると共に、之を郷党の誇とするは好いとしても、政党に対する帰依は一にその持する主義政策」が適切かどうかで判断すべきであり、島根が「民政王国」などと呼ばれるのは「恥」であると述べた。『山陰』は党派上民政党を批判していたが、そのような『山陰』であつても若槻への「崇敬」は否定できなかったのである<sup>80</sup>。

しかし、五・一五事件の衝撃の中で非政党内閣が登場すると、地方紙の論調はそれまでの党派的な主張が徐々に薄まっていく<sup>81</sup>。その中で、地方紙の若槻評がどう変わったのかを次に見ていく。

政党内閣の中断が長期化したことで、地方紙はこれまでの激烈的な党派的对立路線から変化しつつあつた。その中で注目すべきなのが一九三五年に若槻の銅像が床凡山に建造された出来事である。この時

期は既に政党内閣が中断され、日本は若槻ら民政党が目指した国際協調路線から、自らの権益をなりふり構わず拡大する膨張路線へと変わりつつあった。

若槻の銅像の建設自体は一九三〇年に発起人が協議を行い、次いで松江市長の石倉俊寛が発起人会の委員長となって計画が進められた<sup>82</sup>。銅像の完成に際しては、島根県選出の民政党代議士や渡部ら若槻にゆかりのある地元人が『松陽』にコメントを寄せたほか<sup>83</sup>、除幕式には若槻本人も参加した<sup>84</sup>。『山陰』はこの若槻の銅像建設について、「欣快に堪えぬところである」として、若槻の政治的主張全てに賛同は出来ないが、「殊に我が郷党から氏の如き人物を出したことは、何といっても地方の誇りであらねばならない」とした。また、若槻の銅像建設の意味は「郷土教育の上に少からぬ変化を与えるものと信ずる」とした<sup>85</sup>。『松陽』でも若槻が「立志伝の好標本」であるとすると評論が掲載された<sup>86</sup>。

この時点で若槻は民政党総裁を退任しており、政治の表舞台からは退いていた。しかし、それでもなお地域の関係者は若槻の功績に惜しめない賛辞を送った。銅像の建設自体は一九三〇年政党内閣の絶頂期に計画されたが、五年の間に大きく情勢は変化していた。若槻の功績であったロンドン海軍軍縮条約から日本は離脱し、若槻ら当時の民政党の指導者たちが目指した外交協調を基本とする国家構想は過去のものとなりつつあった。しかし、それでも地域が若槻を顕彰したのは、若槻が地域の「立志伝」であり、目指すべき存在であるとのイメージが定着していたからであろう。

## おわりに

本稿では二つの伝記と島根県における若槻の活動を通して、若槻イメージの形成について明らかにしてきた。以下、明らかにした点を整理していきたい。

まず二つの伝記が論じた若槻イメージについてである。両者とも若槻が藩閥などのバックボーンを持たずに首相にまで上り詰めたことを評価する。そして、若槻が普選の成立したことを指摘し、若槻こそ政治の新時代にふさわしい政治家であると主張した。この点は、若槻がスキャンダルとは無縁なクリーンな政治家であるという主張とも関連してくる。当時から若槻に資金面での不安を主張する声があったことを認めた上で、それがむしろ新たな政治家の象徴としてふさわしいと肯定的に評価されたのである。このことは、スキャンダルと若槻が無縁であることを証明するものとされた。また、若槻が掲げた忠孝、正義、進歩の概念が強調されていることも重要である。当時の政治家に道徳的規範を求める状況があり、政治家もまた道徳的な理念を強調して自らの正統性を主張した。両者とも若槻のような「公平」な政党政治家の登場と、普選の実施によって政治が変わることを期待していた。この時点では、政党の問題点が政党自身の更生と普選の実施によって乗り越えられるとする主張がまだ広くなされ、こうした主張が政党内閣制の正当性を担保する論理として展開されていたのである。こうした期待が裏切られた時、政党政治は崩壊の道をたどっていくのである。

次に若槻の島根県におけるイメージについてみていきたい。若槻の

後援会である克堂会は後進の育成が目的であることが強調されていた。若槻のような人物こそ地方の青年が目指すべき目標であった。若槻は帰郷した際に多くの学校で訓話を行っていたが、内容は自らの理念である忠孝、正義、進歩を強調するものであった。ロンドン海軍軍縮条約締結後はその成功の理由に「まごころ」や誠実さを主張した。島根県におけるイメージは、教育の目指すべき模範として、地域の青少年が目指すべき目標としてのイメージとなっていた。伝記で描かれたような「立志伝」、道徳政治家としてのイメージは若槻自らと島根県の教育関係者によって補強されていったのである。一九三五年の銅像建設においても教育的な効果が期待された。伝記というメディアを通して形成されたイメージは、島根県という彼の出身地を舞台に、地方紙というメディアを通して定着したのである。このことは、地方と政治家の関係性が政治的なものとどまらなかったことを意味する。

本稿では政党政治家のイメージ形成という課題について検討してきた。当時の政治家には、政治的イメージだけでなく、教育的なイメージや道徳的なイメージが付与されていた。それは普選の到来という時代の中でさらに重要性を増していった。今後はこうした観点を交えた事例研究を蓄積していくことが必要であろう。また、本稿では十分に検討できなかったが、二つの伝記が教育的な側面を備えていたことも重要であろう。『平民宰相』の著者である尼子は教育評論家であり、『若槻大宰相』は島根県教育会によって編纂された。政党政治家が単なる政治的権威にとどまらず、教育者や教育機関によってその人物像が喧伝されたことは、今後の同時代の政治家論を検討するうえで重要な視座を与えるものである。

政党政治家のイメージ形成について―若槻礼次郎の伝記と地元評からの検討―(杉谷直哉)

なお、当時の果たすべき地方の役割は、中央へ人材を供給することであり、政治家はその役割を地方へ奨励することにあつた。ここからは、当時の中央と地方の関係を考える手がかりともなるが、紙幅の都合により今後の課題としたい。

<sup>1</sup> こうした研究は枚挙に暇がないが、例えば高橋進・宮崎隆次「政党政治の定着と崩壊」坂野潤治・宮地正人編『日本近代史における転換期の研究』（山川出版社、一九八五年）、栗屋憲太郎「昭和の政党」（岩波書店、二〇〇七年）（初版は一九八三年）、筒井清忠「昭和前期の政党政治」（筑摩書房、二〇一二年）など。

<sup>2</sup> 中央における立憲民政党の「政党改良」の取り組みを明らかにした井上敬介「立憲民政党と政党改良」（北海道大学出版会、二〇一三年）、地方における質的転換を扱ったものに横関至「近代農民運動と政党政治」（御茶の水書房、一九九九年）、杉谷直哉「島根県における憲政会・立憲民政党勢力の形成と展開」（『山陰研究』第十号、二〇一七年）がある。

<sup>3</sup> 山室建徳「昭和戦前期総選挙の二つの見方」（『日本歴史』第五四四号、一九九三年）、杉谷直哉「『地方メディア』の政党論」（『洛北史学』第二十号、二〇一八年）など。

<sup>4</sup> 川口曉弘「ふたつの憲法と日本人」（吉川弘文館、二〇一七年）七二頁―七五頁。川口氏は浜口の「道徳政治家」としての取り組みの具体的な事例として、総理大臣として初めて伊勢神宮の式年遷宮に参加したことや、教育勅語四十周年記念式典を開催したことなどを指摘している。

<sup>5</sup> こうしたイメージを視覚的に訴えるメディアの一つがポスターであろう。一九二八年に行われた第一回普通選挙では大量のポスターが貼り出された（玉井清「第一回普選と選挙ポスター」慶応義塾大学出版会、二〇一三年）。

- 6 若月剛史「『平民宰相 若槻礼次郎』」御厨貴監修『歴代総理大臣伝記叢書別巻』(ゆまに書房、二〇〇七年)一四四頁。
- 7 若月前掲論文一四七頁。
- 8 尼子止『平民宰相浜口雄幸』(宝文館、一九三〇年)。
- 9 橋本美保「八大教育主張講演会の教育史的意義」(『東京学芸大学紀要・総合教育科学系、第六六巻第一号』)五六頁。
- 10 永迫藤一郎「『若槻大宰相』の編纂に就て」(『島根評論』第三巻第一一号、一九二六年十一月)。以下、『若槻大宰相』発刊の経緯については、断りのない限りこの記事による。
- 11 『平民宰相』四頁。
- 12 『平民宰相』二頁。
- 13 『平民宰相』五頁。
- 14 『平民宰相』一二頁―二三頁。
- 15 『平民宰相』一四頁。
- 16 若月前掲論文一四五頁。
- 17 『平民宰相』一三九頁―一四〇頁。
- 18 こうした当時の政治・社会状況については清水唯一朗『近代日本の官僚』(中央公論新社、二〇一三年)を参照。
- 19 『平民宰相』一九二頁―一九三頁。
- 20 『平民宰相』二三八頁。
- 21 『平民宰相』二五九頁―二六〇頁。
- 22 若月前掲論文一四六頁。
- 23 『平民宰相』二八五頁。
- 24 『平民宰相』二八八頁―二八九頁。
- 25 『平民宰相』二八九頁―二九〇頁。
- 26 『平民宰相』三〇〇頁―三〇二頁、三四六頁―三四七頁。
- 27 若月前掲論文一四七頁。
- 28 黒澤良「内務省の政治史」(藤原書店、二〇一三年)第一章、河島真「戦争とファシズムの時代へ」(吉川弘文館、二〇一七年)四六頁―四七頁。
- 29 『平民宰相』三九六頁。
- 30 若月前掲論文一四七頁。
- 31 治安維持法については中澤俊輔『治安委維持法』(中央公論新社、二〇一二年)を参照。
- 32 『平民宰相』三九七頁―三九八頁。
- 33 『平民宰相』四一八頁。
- 34 利益誘導については、有泉貞夫「昭和恐慌前後の地方政治状況」(『年報・近代日本研究』6 政党内閣の成立と崩壊)山川出版社、一九八四年)、同「日本近代政治史における地方と中央」(『日本史研究』第二七一号、一九八五年)。
- 35 若槻礼次郎『明治・大正・昭和政界秘史』(講談社学術文庫、一九八三年)二八八頁。
- 36 『平民宰相』四四七頁。
- 37 同右。
- 38 『平民宰相』四九六頁―五〇〇頁。
- 39 『平民宰相』五〇四頁―五〇九頁。
- 40 『平民宰相』五一〇頁―五一二頁。
- 41 『若槻大宰相』二頁。
- 42 同右。
- 43 『若槻大宰相』七二頁―七四頁。
- 44 『若槻大宰相』七九頁―八三頁。
- 45 『若槻大宰相』九一頁―九八頁。
- 46 『若槻大宰相』一〇二頁―一〇三頁。但し、今津敏晃氏は、後年に若槻が語ったこととして、若槻は政党を「民意判定機関」であるととらえており、桂の「政策遂行の基盤作りの政党観とはやはずれる」としている(今津敏晃

〔若槻礼次郎〕筒井清忠編『昭和史講義3』筑摩書房、二〇一七年、四〇頁。

47 『若槻大宰相』一〇六頁。

48 『若槻大宰相』一一四頁。

49 『若槻大宰相』一一八頁―一九九頁。

50 『若槻大宰相』一九九頁。

51 『若槻大宰相』一九九頁―二〇〇頁。

52 『若槻大宰相』二〇六頁―二〇七頁。

53 『若槻大宰相』一四六頁。

54 『若槻大宰相』一五〇頁。

55 『若槻大宰相』一五一頁―一五二頁。

56 『若槻大宰相』一七二頁。

57 『若槻大宰相』一七二頁―一七四頁。

58 山室建徳「昭和戦前期総選挙の二つの見方」(『日本歴史』第五四四号、一九九三年)四〇頁―四二頁。

59 島根県の地方紙の詳細については杉谷前掲『「地方メディア」の政党論』を参照。

60 克堂会の結成と展開とその役割については杉谷前掲「島根県における憲政会・立憲民政党勢力の形成と展開」を参照。

61 「克堂会設立要旨並規約」「渡部寛一郎文書 6・13・9・3」。

62 同様のことが克堂会の設立趣旨書にも書かれている(渡部寛一郎文書 6・13・9・4)。

63 克堂会が憲政会の活動組織としての役割も果たすことへの反発から一部の会員による分離独立を目指す動きも見られるようになっていく(『大阪朝日新聞山陰版』一九二五年八月八日、九日)。

64 『山陰』一九二六年一月三〇日夕刊。

65 杉谷前掲「島根県における憲政会・立憲民政党勢力の形成と展開」六頁―七頁。

66 『島根評論』の若槻特集号については杉谷前掲『「地方メディア」の政党論』第二章第一節を参照。

67 「若槻前首相を迎えた効果」『松陽』一九二七年一月二五日、二六日。

68 「我郷土の誇るべき政治家」『松陽』一九二九年一月一五日。

69 「若槻全権の出発を前に」『山陰』一九二九年一月二五日。

70 「若槻全権を送る」『山陰』一九二九年一月三〇日。

71 「若槻氏の帰郷を迎えて」『松陽』一九三〇年一月二日。

72 『松陽』一九三〇年一月二日夕刊。

73 『松陽』一九三〇年一月六日夕刊。

74 『松陽』一九三〇年一月七日夕刊。

75 『松陽』一九三〇年一月九日夕刊。同様に松江の女学校や師範学校、中学校などの生徒を相手にして同じ趣旨の訓話を行っている(『松陽』一九三〇年一月八日)。

76 「第二次若槻内閣を祝す」『松陽』一九三二年四月一五日。

77 『松陽』一九三一年四月一六日夕刊、一七日、一七日夕刊。『松陽』四月一六日によると、克堂会員による仮装行列が松江で行われたほか、若槻の旧居保存会によって若槻の旧居が解放され、ゆかりの品が展示され、渡部寛一郎をはじめ克堂会の幹部が解説にあたったという。

78 『松陽』一九三二年四月一九日。

79 「堂々たる若槻総裁の演説」『松陽』一九三二年一月二二日。選挙戦で島根入りした若槻の動きを『松陽』は詳しく伝えた(二月一九日夕刊)。

80 『山陰』一九三二年一月二二日。別の社説では「若槻男に問う」と題して第二次若槻内閣は政策の行詰りによって総辞職したのであると述べた上で、緊縮財政を批判し、ロンドン海軍軍縮条約などの協調外交政策を「追従主義外交」であるとした。これだけの批判を掲げた上で若槻が自らの地盤である「民政王国」「若槻王国」を守ろうとすることは同情するが、「徒らに空漠なる名辞を羅列して反対党の攻撃を見ると云う態度は若槻男の偉大さを傷

つけるものとして残念に思う。夫れよりも率直に失敗は失敗として謝り他日の成功を盟うことに依りて郷党の支持を請うべきではないか」と結んだ(一九三二年二月一九日)。反対党の総裁とはいえ、島根における若槻の名望に配慮した社説と言えよう。

<sup>81</sup> 杉谷前掲「『地方メディア』の政党論」。

<sup>82</sup> 『松陽』一九三五年四月三日。

<sup>83</sup> 『松陽』一九三五年四月三日。コメントを寄せているのは、絲原武太郎貴族院議員、島根県選出の民政党衆議院議員であった原夫次郎、俵孫一、櫻内幸雄、木村小左衛門、石倉松江市長、佐藤喜八郎克堂会会長、川崎卓吉民政党幹事長、土谷連之助松江市議会議員、渡部寛一郎、岡崎国臣らであった。

<sup>84</sup> 『松陽』一九三五年四月三日号外。

<sup>85</sup> 「若槻男寿像の建設」『山陰』一九三五年四月三日。

<sup>86</sup> 『松陽』一九三五年四月三日。

本稿は山陰研究共同プロジェクト一九一三「近代山陰地域の文化教養環境における漢詩文の位置―若槻克堂と剪淞吟社の学際的研究」二〇一九〜二〇二一年度、代表・要木純一による研究成果の一部である。



# On the impression forming process of a politician: Considering on the biography and reputation of Reijiro Wakatsuki

SUGITANI Naoya

(San'in Research Center, Faculty of Law and Literature, Shimane University)

## [Abstract]

For party politics before the war, the image strategy was emphasized with the implementation of the men's election. In other words, the construction of such a new strategy was indispensable in order to appeal to the increased number of voters to support their party widely.

Reijiro Wakatsuki, who was president of the Kenseikai Party and the Minsei Party—political bodies responsible for Japan's party politics before the war—and who became prime minister, was a pioneer in looking at such an image strategy. Wakatsuki was one of the people who established the general election system, and it was expected that the cabinet would hold the first ordinary election. Wakatsuki was thus regarded as a symbol of political reform. These image strategies were developed through biography and activities in Wakatsuki's home of Shimane Prefecture as a means to counter negative impressions of political parties. This reveals that pre-war political parties were developing strategies to counteract criticism of political parties.

Keywords : Wakatsuki Reijiro Kokudokai Biography Party politics General election